

日本地衣学会

No.140

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	521
	ISAM10のポストコンGRESS フォーレ（筑波大学 菅平高原実験センター）に 参加して／石原 峻	521

会員通信 *From Members*

ISAM10 のポストコンGRESS フォーレ（筑波大学 菅平高原実験センター）に参加して

Report of Post-Congress Foray of ISAM10 in Nagano (Sugadaira Montane Research Center, University of Tsukuba), September 2016 / by ISHIHARA Takashi

>>>>>> 石原 峻：名古屋大学生命農学研究科 博士後期課程

2016年9月2日と3日に、ISAM10（第10回極地と高山帯の菌学国際シンポジウム；The 10th International Symposium on Arctic-Alpine Mycology）の菅平高原周辺でのポストコンGRESSフォーレに参加した。

9月2日のフォーレは、長野県高山村の毛無峠で行われた。ISAM10には、日本の他に欧州の6ヶ国（デンマーク、フィンランド、ロシア、オーストリア、ベルギー、イギリス）の先生方も参加され、国際色豊かなものとなった。観察場所の毛無峠（図1；標高約1800 m）は、長野県と群馬県の境に位置し、南の群馬県側にはかつて国内最大級の硫黄の産出量を誇った小串鉱山跡がある。周辺は風が強いためか、高木は見られず、ガンコウランやクロマメノキ、コケモモ

などからなる矮性低木林、ハイマツからなる低木林、ササやリンドウなどからなる草原となっていた。フォーレが始まると、参加者の先生方は、思い思いに峠の



図1. 毛無峠と破風岳（写真奥）。



図 2. *Cladonia uncialis* オニハナゴケ.



図 3. ロープウェイの遺構の下で地衣類を観察.



図 4. *Rhizocarpon* sp.
チズゴケ属の痾状地衣.



図 5. *Cetraria laevigata*
マキバエイランタイ.



図 6. *Cladonia* sp.
褐色のハナゴケ属開口群の地衣類.

西側の破風岳へ続く道を登って調査・採集を始めた。年配の先生も猛烈な勢いで山道を進んでゆくパワーと好奇心に圧倒された。

一方、秋田県立大学の山本先生と綿貫さん、森林総合研究所の佐藤先生、筑波大学菅平高原実験センターの出川先生と大学院生の升本さん、センターボランティアの松崎さん、横浜国立大学の中島先生、安中市在住の居村さん、および筆者からなる地衣類グループは、破風岳とは反対側の御飯岳方面へ続く尾根を登りながら地衣類を観察した。ヒロハセンニンゴケやオニハナゴケ (図 2)、タカネアカミゴケなどの高山に生育する地衣類が多く見られ、かつて硫黄の鉱石などを運んでいた小串鉱山の物資輸送用のロープウェイの遺

構の下 (図 3) ではイオウゴケも見られた。尾根の草原に点在する岩場には、チズゴケ属 (図 4) やチャシブゴケ属の痾状地衣やハイイロキゴケなどのキゴケ属の地衣類が見られた。途中の昼食場所付近ではツブラッパゴケやマキバエイランタイ (図 5)、ミヤマキゴケなどが見られ、さらに尾根を登る途中では灰白色からオレンジ色へ変色した痾状地衣が見られた。御飯岳から続く稜線の平坦部へ登りきると、岩場で日焼けして褐色になったハナゴケ属の開口群 (マタゴケなどが含まれる) の地衣類 (図 6) が、ハイマツの枝にはフクロゴケ属の葉状地衣が見られた。この後は来た道を引き返して、地衣類グループは 14 時半ごろに解散となった。



図7. 東麓ノ登山の山頂付近から眺めた池の平湿原。

9月3日のフォーレは、長野県東御市の池の平湿原および東麓ノ登山周辺（図7；標高 約 2000 m～2200 m）で行われた。朝 9 時に菅高原実験センターを出発して 1 時間ほど車で移動し、現地に着した。前日と同様に調査・採集は各自が思い思いに散策する形式で行われた。池の平湿原から東麓ノ登山の中腹まで広がっているカラマツ林では、ハリガネキノリやホネキノリ、ヤマヒコノリなどの樹状地衣、カラクサゴケ属の葉状地衣など、カラマツ林を抜けた山頂付近の低木林ではハナゴケやマキバエイランタイ、スルメゴケなど、ガレ場の岩上にはタカネゴケ属（図8）や、チズゴケ属などの痾状地衣が見られた。さらに、



図8. *Melanelia* sp. タカネゴケ属の葉状地衣。

東麓ノ登山から西麓ノ登山へ続く尾根には、ときどきガンコウランやクロマメノキなどの矮性低木の根元にハナゴケなどの群落は見られたが、乾燥かつ強光が降り注ぐ環境のためか大型の地衣類は思っていたほどには見つからなかった。ただ、2つの山頂間の鞍部の岩場では、チズゴケなどの他にイワタケ属の葉状地衣（図9）の生育が確認できた。

この後は、午後 3 時過ぎに池の平湿原を出発して菅高原実験センター（標高 約 1300 m）に戻ったが、懇親会まで 2 時間ほど間があったので、筆者は升本さんにセンターの敷地内にある大明神の滝付近の地衣類の群落へ案内していただいた。途中の森の林床にはコショウイグチやベニタケ、サンコタケなどのキノコが生え、滝の下流の岩上にはアオキノリやウスツメゴケ（図10）といった藍藻共生地衣が生育していた。この後にセンターの建物に戻った後は、山本先生による地衣類の呈色反応の実習があった。懇親会は午後 6 時から始まり、ナチュラルリストの方々が用意してくださった 6 種のキノコ汁や手打ち蕎麦、コゴミや淡竹などの山菜、おやきや奈良漬などの信州の郷土料理、焼き鳥や春巻き、バーニャカウダやクラッカー、ナシやブドウなどの果物、信州ワインや手作りの甘酒などがテーブルの上いっぱい広げられ、参加者

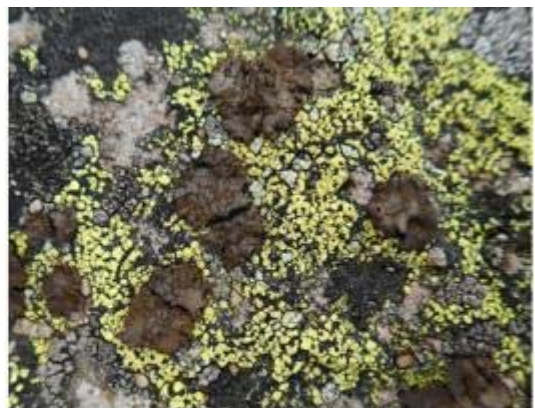


図9. *Umbilicaria* sp. イワタケ属の葉状地衣。



図 10. *Peltigera degenii* ウスツメゴケ.



図 11. 懇親会の食卓の料理の数々.

の方々好きな料理を取って食べながら歓談を楽しんだ (図 11)。

今回の観察会では、2 日間とも晴天に恵まれ、毛無峠や池の平湿原などで高山帯の地衣類を観察することができただけでなく、高山帯に特徴的な植物やキノコなどの菌類も観察することができた。また、ISAM10 や菅平高原実験センターの地衣類以外の菌類を研究されている方々と交流することができ、それ

ぞれの研究分野について興味深いお話を伺い、研究に対する旺盛な情熱や澆刺さ、好奇心に感銘を受けた。

最後に、本観察会にあたり、観察および採取を許可いただいた出川先生、豪華な懇親会を準備くださった菅平高原実験センターのナチュラルリストの皆様、貴重な交流の機会をくださった ISAM10 の参加者の皆様に感謝申し上げます。

* * * * *

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102 号 378 ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

● *Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 140, pp. 521-524: eds. Nakashima H., Bando M., Kawakami H. & Harada H., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 21 Dec. 2016.

日本地衣学会ニュースレター 140号

発行日：2016年 12月 21日

編集：中嶋裕之・坂東誠・川上寛子・原田浩

発行者・発行所：日本地衣学会

〒658-8558神戸市東灘区本山北町4-19-1

神戸薬科大学 薬化学研究室

©2016日本地衣学会 (© 2016 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。